

## 01-2 抑制を必要とする患者が病棟で落ち着いて生活できるために ～回復期病棟における集団活動の効果～

○坂田 知穂(OT), 石田 千尋(OT), 北垣 敏樹(OT), 安原 弘子(OT)

医療法人社団康人会 適寿リハビリテーション病院

Key word : 回復期リハビリテーション病棟, 集団活動, BPSD

【はじめに】 当院回復期病棟における認知症や高次脳機能障害を呈した患者様の BPSD 軽減や介護者負担感の減少を目的とした集団活動を通して、病棟生活に変化がみられた事例 A 氏について考察を交えて報告する。発表に際し事例の同意を得た。

【事例紹介】 A 氏：70 歳代男性，左大腿骨人工骨頭置換術，アルコール依存症と脳梗塞の既往あり。MMT 左下肢 2，体幹 3。現状理解は不十分で安全管理が困難であり，ADL は車いす使用し食事・整容以外声掛けや介助が必要であった。自宅では徘徊が多く，入院中も独歩でベッドから離れることがあり転倒転落予防の為，抑制対応を行っていた。

### 【経過】

1. 個別介入期(入院～34 病日)：夜間不眠で倦怠感強く ADL は依存的で拒否もあった。居室では起き上がりや移乗を繰り返し終始落ち着かない状態であった。拒否が軽減し落ち着いて過ごす時間が増えるよう OT は関わり方や集中できる作業を模索した。結果，離床して過ごせる時間は増えたが ADL の依存傾向や拒否は残存した。
2. 集団活動前期(35～74 病日)：離床はできたが作業の実施が難しい A 氏のできる事を増やし依存傾向や拒否を軽減する為に，個別介入に加え 1 時間の集団活動を 5 回実施した。A 氏を含む抑制対応中の患者 4 名で，個室にて張り子でハロウインの飾りを作成した。初めは作業を無理に勧めず集団の場で落ち着いて過ごせるよう関わると，徐々に拒否は軽減し，新聞紙をちぎる作業に集中できる時間が増えた。病棟生活ではトイレでの下衣操作を自身で行なう事が増えた。
3. 集団活動後期(75～81 病日)：集団活動中の A 氏の様子を病棟生活でも活かせるよう場所を病棟ロビーに変更し，正月の飾り作りを 3 回実施した。型紙にテープを巻く作業を自発的に行ない，他患と

連携する工程では配慮や交流する場面がみられた。集団活動中の A 氏の様子を見た Ns からは称賛や感謝を伝えられた。結果，病棟生活では「コーヒーを飲む」「トイレ」等行動の目的が明確となり，徘徊や拒否は減少した。

【A 氏の変化の検証方法と結果】 集団活動前期と後期で検証した。BPSD (CMAI 48→40 点)，活動の主体性 (VQ 18→33 点)，認知機能 (MMSE 16→20 点)，介護者負担感 (J-ZBI\_8 平均 7.5→2.5 点) に改善がみられた。

【考察】 集団活動前後で A 氏の BPSD 軽減と介護者負担感の改善を認めた。BPSD への介入には，能力を維持するための課題への介入と環境面への介入，そして介護側のコミュニケーションの改善等が効果的であるとされている(加瀬裕子ら，2012)。そして集団レクリエーション介入により第一段階として BPSD が改善し，その結果として BPSD に由来する介護者負担感が減少する可能性が示唆されている(坂本将徳ら，2017)。A 氏が無理なく取り組み且つ集中しやすい作業の選定と，他者との交流や役割活動を促進する集団の設定，さらに多職種からの A 氏に対する肯定的な関わりは，A 氏にとって病棟生活の安定と安心を保障し無目的な徘徊等 BPSD の軽減に繋がったと思われる。それに加えて安定と安心が得られる環境により A 氏が主体性や自発性を発揮できるようになった事で，介護者側からの A 氏への理解が促進され介護者負担感の軽減に寄与したのではないかと考える。

今後は，在宅生活においてデイサービスへの参加を拒否していた A 氏の退院後の環境を保障する為に，回復期病棟での集団活動の様子や作業種目，環境等の情報を在宅で関わるスタッフと共有し，活かしていきたいと考える。